

## 修士論文要旨

---

本会の高橋絹子会員が2009年1月に以下の修士論文を上智大学に提出し、修士号を授与されました。以下にその概要を紹介します。

論文題目: Identifying the Common Problems in English-to-Japanese Consecutive Interpretations Performed by Japanese Interpreting Students: A case of Japanese Interpreting Students

提出機関: 上智大学博士前期課程言語学専攻英語教授法コース

提出者: 高橋絹子

指導教授: 渡部良典教授

提出年月: 2009年1月14日

口頭諮問年月: 2009年1月29日 主査: 渡部良典教授 副査: 吉田研作教授、Mr. Neal Cunningham (Josai International University)

英文要旨: The purpose of the present paper is to identify the problems that Japanese interpreting students may encounter and to establish causes for them in the expectation that they may help devise a method that should ideally be incorporated in a training program.

For this purpose, nine interpreting students were asked to consecutively interpret four different English texts. It was discovered that omissions in interpretations were one of the problems. Omissions occurred when the participants encountered an unknown word and a problem in speech perception. Also omissions occurred in the parts where literal interpretations were not suitable. These parts required the participants to take longer time to interpret. Therefore, the participants failed to listen to the following word or sentence, causing further omissions of interpreting and distorting the meaning of original texts. In order to reduce such omissions, it is necessary for students to acquire “top-down” processing of comprehension.

和文要旨

1. 先行研究

同時通訳に関しては、Barik (1971)、Altman (1994)の実証研究が存在する。Barik (1971)は、プロの通訳者と通訳訓練生の仏英同時通訳を Omission (訳もれ)、Addition (話者が言っていないことの付け足し)、Substitution (誤訳) の3つの観点で分析。その数をプロの通訳者と訓練生の間で比較した。その結果、通訳訓練生の訳にはプロの通訳者と比較して Omission (訳もれ) が多く、また単語単位の訳出(at a word-for-word level)が多いと結論づけている。また Altman (1994)は、訓練生の仏英の同時通訳を質的に分析し、Omission (訳もれ) の原因を特定している。ただし、筆者の調査の限りにおいては、通訳訓練生の逐次通訳に関する実証研究はみあたらなかった。従って、

本研究では訳出の分析において Barik (1971)の同時通訳分析方法と Omission(訳もれ)の分類を一部採用した。

## 2. 問題提起

1) 日本人通訳訓練生の英語から日本語への逐次通訳には具体的にどのような問題が存在するのか。2) その問題の原因と思われるものは何か。3) その問題はどのようにしたら解決できるのか。

## 3. 実験

### 3.1 実験の目的

通訳訓練を受ける訓練生の英日の逐次通訳を分析することで、その問題を特定し、その上でさらにその原因となっていると思われるものを考察する。

### 3.2 実験参加者

日本人通訳訓練生 9 名が参加した。本研究における訓練生の定義は、1) 社会人で民間の通訳学校に通って通訳訓練を受けている者または、2) 日本の大学院の通訳コースに在籍する者である。実験参加の条件として、1) 最低 1 年間、通訳訓練を受けていること。かつ 2) 英検 1 級合格者、もしくは TOEIC900 点以上の者とした。

### 3.3 マテリアル

通訳学校や大学院で使われている教材のテーマに準拠した 4 編のマテリアルを用意した。テーマは、1) 国際関係(ミャンマーの民主化デモ) 2) アメリカの一般事情(ロスアンゼルスのパックパックによる無料食糧プログラム) 3) 科学(ビタミンの話) 4) アメリカ政治(クリントン対オバマの選挙戦)の 4 編とした。1)と 2)は日本在住でアメリカ東部出身のアメリカ人中学英語教師が VOA Special English と CBE イブニングニュースのテキストを吹き込み、3)と 4)はインターネットからとった VOA Special English と CBS イブニングニュースをテープレコーダに吹き込んだものを使用した。

### 3.4 実験の手続き

#### 1) 通訳実験

4 編のテキストを、合計 23 のタスクをに分け、1 タスクごとにテープを止め、参加者が逐次で通訳し、それをテープレコーダに収録した。実験は 1 対 1で行い、現場の状況になるべく近づけるため、テープの再生は 1 回のみとした。

#### 2) インタビュー

実験終了後に、オリジナルの英文テキストを参照しながら、テープを再度聞き、タスクごとにテープをとめ、自分の通訳を内省してもらった。その際、Omission(訳もれ)、Error(誤訳)については、考えられる原因を述べてもらった。インタビューのコメントはすべてテープレコーダに収録した。

### 3.5 データの分析

収録したものを聞きながら、オリジナルの英文と付け合わせ、Barik (1971)の手法に則り、Omissions(訳もれ)、Additions(付け足し)、Substitutions(誤訳)を調べた。ただし、Barik (1971)の分析対象は仏英の通訳であり、また「incidence の数を数える」という表現を用いており、具体的な計算方法は記されていない。そのため、本研究では、同時通訳の際に用いるサイトトランスレーションの技法を用い、チャンクの単位で分析を行った。3 人のプロの現役

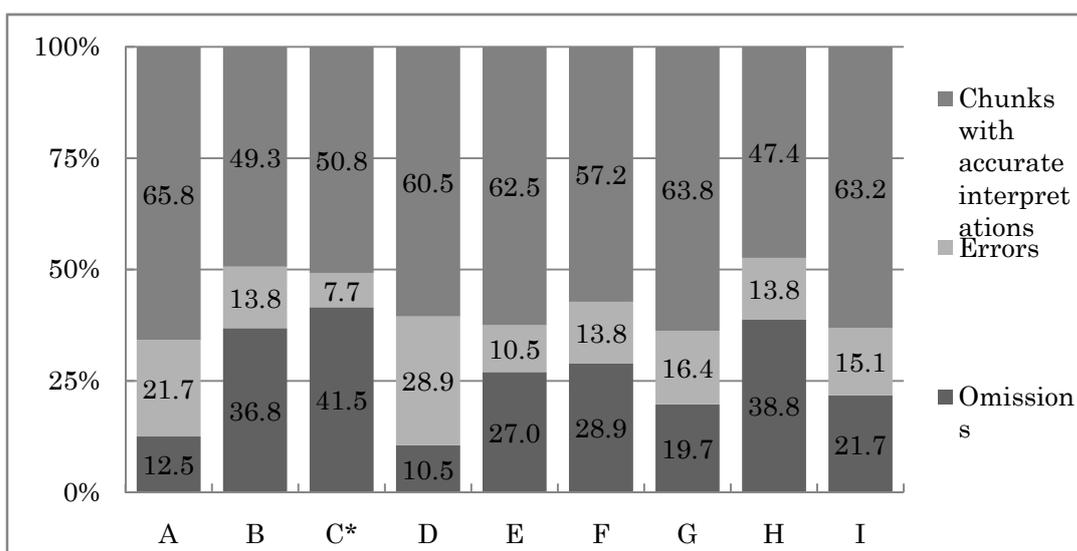
通訳者がスラッシュを入れたものに合議を得て、それをもとに以下の要領で Omissions(訳もれ)、Additions(付け足し)、Substitutions(誤訳)を数えた。

参加者 B の例

Officials say <sup>1</sup> / Secretary-General Ban Ki-moon <sup>2</sup> / telephoned <sup>3</sup> / Gambari (Monday) <sup>4</sup> / to express support for his mission <sup>5</sup> / and that Mr. Ban asked Gambari <sup>6</sup> / to call on Burmese authorities to <sup>7</sup> / cease repression, <sup>8</sup> / release detainees<sup>9</sup> / and move toward real democratic reforms.<sup>10</sup> /

Participant B's interpretation : バンキバン特使の役目は相手側政府と交渉し、拘留されているものたちの釈放と、それから民主主義への道を歩むよう勧告することになります。

網掛けの部分は、Omission(訳もれ)であり、下線部は Substitutions(誤訳)である。定義をより明確化するため、Substitution(誤訳)の修士論文での英語表記は Error(誤訳)とした。実験参加者 B の場合、このタスクでは Omission(訳もれ)が 3 か所、Error(誤訳)が 2 か所となる。同じ要領で、実験参加者 9 名の 23 のタスクをすべて分析した。(ただし、参加者 C は都合により最初のふたつのマテリアルしか通訳を行っていない。従って参加者全体のタスクの合計は、194 である。)この分析結果は 2 名の大学英語講師が再検討している。分析の結果は以下のグラフの通り。一番下の黒の部分は、Omission(訳もれ)、まん中の部分は Error(誤訳)を示している。



参加者全体の Omission(訳もれ)平均は 26.40% (SD=11.24)、Error(誤訳)平均は 15.77% (SD=6.26)であった。平均で見ると Omission(訳もれ)の方が Error(誤訳)より多くなるが、マンホイットニー検定の結果では両者の間に有意差はなかった(U = -1.26; n.s.)。従って、本研究では

通訳訓練を受ける訓練生の英日の逐次通訳の問題のひとつは、Omission (訳もれ) であると結論づけるにとどめた。本研究でのこの場合の Omission (訳もれ) とは、内容の要約や情報もれを指すのではなく、訳出の内容が違ってしまふことを意味する。

### 3.6 Omission (訳もれ) の分析と考察

次に Omission (訳もれ) の原因を考察するため、一部、Barik's (1971) の分析を利用して、Omission (訳もれ) がどこで起きているのかを調べてみた。その結果、Omission (訳もれ) は 1) Skipping omissions 2) Compounding omissions 3) First sentence omissions 4) Final sentence omissions 5) Random omissions 6) Conjunction omissions 7) Entire sentence のように分類された。さらに、通訳実験後に参加者から集めたインタビューデータに基づき、Omission (訳もれ) の原因と思われるものを特定した。1) 固有名詞を含む未知語が出てきた場合 2) 知っていても馴染みのない単語が出てきた場合 3) 音声として聞きとりのできないところがある場合 4) 直訳では意味が通じない場合 5) 訳出が単語単位である場合である。いずれの場合にも後続部分を聞きもらし、さらに Omission (訳もれ) が生じる。従って、部分的な Omission (訳もれ) により、聞こえた部分のみ訳すこととなり、訳出の内容がゆがめられてしまい、結果的に内容が不正確となる。

## 4. 結論

本研究において、Omission (訳もれ) が通訳訓練生の通訳のひとつの問題であるという結論を得たが、これは Barik (1971) と同じ結論である。訳出を考えている間に、後続部分の聞き取りができなくなり、その個所に加え、後続部分のさらなる Omission (訳もれ) も引き起こすこととなる。これは単語ひとつひとつにとらわれ過ぎているためと思われる。この点は、Barik (1971) の訓練生は単語単位の訳出が多いという結論とも一致する。また、Seleskovitch and Lederer (1989) が言うように、単に単語だけではなく、伝えているメッセージを聞く必要がある。さらに Gile (1995) によれば、通訳の際の理解は、単に単語の認識にとどまらない。しかし、単語をひとつひとつ頼って訳しているということは、トップダウンのリスニングのアプローチは用いられることなく、ボトムアップの理解しか使っていないことになり、コンテキストを追うことができなくなるとと思われる。

## 5. 教育的示唆

こうした問題を解決するには、通訳の練習を繰り返すという従来の訓練方法に加えて、トップダウン方式の理解を養うような要旨の聞き取りも取り入れることを提唱する。また単語を覚える際にも、なるべく早く引き出せるような“quick response”の練習を取り入れるべきである。しかも、専門用語だけではなく、一般的な単語でも、すぐに日本語に変換できないようなものをもっと学習するべきであろう。

## 6. 本研究の問題

1. 事前に参加者の Listening Comprehension Tests を行っていないため、参加者のリスニングのレベルが正しく把握できていなかった。そのため理解できていても訳せないのか、理解もできていないのか不明な点がある。
2. チャンクを用いた訳出の評価方法に、科学的な手法が欠けている。

## 7. 今後の研究

1. 難易度のより低いマテリアルを使用して、理解と約出の関係を見る。
2. 帰国子女の訓練生との日本でしか英語教育を受けていない訓練生を比較する。
3. 教育的示唆に含まれる訓練法の実証研究を実施して、効果測定を行う。

.....

【著者紹介】 高橋絹子 (Kinuko TAKAHASHI) フリーランス英語通訳者、上智大学博士後期課程言語学専攻コース在学中、上智大学音声学研究室所属。専攻は応用言語学。

連絡先: kinuko@dc4.so-net.ne.jp

【参考文献】(本稿の引用のみ)

Altman, J. (1994). Error Analysis in the Teaching of Simultaneous Interpreting: A Pilot Study, In Lambert, S. and Moser-Mercer, B. (Eds.) *Bridging the Gap*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Barik, H. (1971/1991). Simultaneous Interpretation Qualitative and Linguistic Data. In Pöchhacker, F. (Ed.) *Interpreting Studies Reader*, London: Routledge.

Gile, D (1995). *Basic Concepts and Models for interpreter and Translator Training*. John Benjamins, Amsterdam, The Netherlands.

Seleskovitch, D. and M. Lederer D (1989). *A Systematic Approach to Teaching Interpretation* (translated by Jacolyn Harmer.), Alexandria, VA: The Registry of Interpreters for the Deaf.

